
孤独な魔王

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な魔王

【Nコード】

N5063BA

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

魔王と勇者。人間と魔族。それは七百年もの間、争い続けていた。

人間は生きるため魔族をと闘っている。

しかし、違った。本当に人間を、この世界を護っているのは魔王だった。

魔王は一人孤独に耐えながら、世界を護っていたのだ。

だが、新たな勇者の出現によって全てが変わった。

人間の本当の敵、そして魔王の真意が明かされた勇者は魔王と共に

に
.....

第1話（前書き）

感想・評価よろしくお願いします。

第1話

太陽が沈みかけている今、私はとある城の最上階に繋がる階段を上っている。

城の名は「魔王城」。

最上階の最深部には「魔王の間」と恐れられている部屋が待ち構えている。

いや、真に待ち構えているのは魔王そのものだろう。

なぜ私はそんな場所に行くのか、それは私が勇者だからだ。

疑わしく思うかもしれないが、年齢十五の勇者である。

勇者にしても異例とも言われる程の小さな子供の頃から既に力があつた。

故に歴代勇者の中でも最高にして最強と呼ばれている。

私：私たちが人間の目的は、七百年間続いている魔族との争いに終止符を打つこと。

そのために私は一年前から、魔王討伐を始めた。

最初は私ともう一人の計二人で始まり、途中で一人、二人と増え、最終的には私を含め、六人で旅した。

仲間と過ごす楽しい時間もあったが、基本的にはおしゃれや遊びはありえず、髪は傷み、肌は荒れ、女としての楽しみは無い、闘いに明け暮れる日々だった。

しかし、その苦痛の旅も今日で終わる。

魔王との一騎討ち。

つまるどころの最終決戦。

だが、本当のところ、私は魔王と一騎討ちなんかしたくないと思

っている。

私は魔王を

圧倒的戦力で取り囲み、そして、抹殺したい、とさえ思っている。

そう　私が魔王に勝つのではなく、人類が魔族に勝つために。

私は、人々が思い、尊敬する「理想」の勇者とは、決して、断じて違う。

しいて言うなら、私は「現実的」な勇者だ。

これは伝承なのだが、そもそもこの争いの始まりは、七百年前に今尚君臨している魔王が生まれたからであるらしい。

もちろん、生まれたというのは、魔王が魔王たる力を持って魔族の王として君臨したことを意味する。

なら、魔王が生まれる前はどうかだったのか、と聞かれると、そのことは何も伝承されていない。

もしかしたら、互いに無関心で関わりが無かったのかもしれないし、今のように争っていたのかもしれない。

しかし、魔王が生まれたその日、世界の半分近くの土地や人間、動物が跡形も無く、消されたらしい。

魔王のたった一撃によって。

それ以来、人間と魔族との闘いが始まった。

人間側からも、この間に何人も勇者と呼ばれる者が生まれた。

が、魔王によって全員が消されたらしい。

七百年前のように…跡形も無く。

死体が残った勇者はいなかったとも伝わっている。

そのような現実を目の当たりにして、人間は怯えた日々を余儀なく過ごすなければならず、苦しんでいる。

旅を通して、よりそう感じた。

だから助けたい、と思う。

全ては魔族のせい、魔王のせい、とも思う。思っている。

だが、同時に魔族にも魔族の生活が、命があることも分かっている。

魔族の中にも弱い物がいて、苦しんでいる物もいることを目の当たりにしたのも事実。

人間だけが一方的な被害者ではなく、私たちも、魔族だからという理由だけで戦意の無い物も殺してきたのも隠し用の無い事実。

私はそのことを、その現実を理解した上で、魔族を皆殺しにし、その屍を背負って生きていく、と言う覚悟がある。

だからこそ、確実に殺したかった。

たとえ、人々から残酷な勇者と呼ばれてもその覚悟は揺れない。

しかし、魔王軍も頭が回る様で、待ち伏せや罠等を上手く使って、十万人もの連合軍の兵士と、ともに旅を続けた五人の仲間は魔族の思惑通り、足止めをくっている。

連合軍とは世界各国の兵士と傭兵の集団である。

それは、私が魔王討伐を始めて数ヶ月で数体の魔王軍の幹部を倒したことによって人々が希望を持つようになり、ようやく、数週間前結成されたものだ。

その彼らは足止めにあっているのだが、それでもどうにかして私

だけはここまで来た。

周りは私のことを止めたのだが、魔王城が手薄な状態の今行かなくてどうする、と言って一人…独りで来た。

この魔族の頭を使った行動により、結果がどうであれ、兵の士気は大きく落ち込むだろう。

そうなる予測を立てて、独りで行くのと、皆で行くことを天秤にかけた結果、こちらの方が勝率が高いであろうと結論づけ、選んだ。

そして、魔王の「謁見の間」にたどり着いた。

この奥が「魔王の間」であるのだが、この部屋には何か違和感がある。

部屋が五百メートル四方程度の大きさなのは、人間の数十倍大きな身体を持つ魔族もいるのでよいとしても、室内にほとんど物が無い。

あるのは魔王が座るためであろう椅子のみ。

こんなところを謁見の間とするべきではない気もする。

あと、こちらの方が問題…というより違和感が大きいのだが、ここからは具体的には何とも言えないものの、嫌な空気が流れているように感じられる。

それでも、ようやく終焉を迎えられることができる。

私がそう思っているその時

「待て、勇者…！」

と、目の前に人型の魔族が出てきた。

見た目は皆、絶世の美少年、美少女にしか見えないのだが…それは人型ではあっても人間ではないからである。

わらわらと出てきたその数はおよそ三十。

その程度、私にかかればものの数ではない。

それにその魔族達は全員がまともに闘える状態ではいレベルの大怪我を負っている。

隠れていればいいものを、と僅かながら思いもしたが、私は非情になり、右手に携えている聖剣に力を込め、戦闘態勢に入る。

それと同時に美少女のなりをした一体の魔族が叫ぶ。

「全員自爆でいい！」

魔王様のために、少しでも勇者に傷を付ける…！」

どうして？

そう思いながら私は闘いに意識を向けた。

私は右手で持っている聖剣ではなく、左手を空中に持ち上げて、体内の魔力を必要量だけ左手に集める。

そして、魔族に向けて魔術式を展開する。

『爆雷』

初級魔術・『爆雷』。

それは雷いかずちとわずかな炎が混じった電撃を放つ。

故に速さこそあるものの、威力が低すぎるため、また術式も簡単であるから初級魔術なのである。

一般的にはこの魔術は速さを活かし、地面にぶつけ、爆風や砂ぼ

こりを発生させて目眩ましに使う魔術のだが、私が使えば、いくら初級だからと言っても、そこそこの威力がある。

だから、

「ぎゃあー!!」

「ぐわっ!!」

「がはっ!!」

などと言った悲鳴を上げ、三十体程いた魔族は私に近づくこともできずに一体残らず倒れこんだ。

だが、一体も死んでいない。

私は、殺さなかった。

もちろん情け等の感情ではない。

私はこの魔族達の指揮をしていた一体の首元に剣先を向け、

「質問に答えなさい。なぜ貴様らはそこまで魔王のために行動できる？」

答えなければ、お前も、お前以外のここにいる魔族も全て殺す」

そう尋ね、脅す。

この魔族共はそのためだけのために生かした。

私は回答を待つ。

その魔族は顔を上げ、私を睨みつけ、荒々しく叫ぶ。

「黙れっ！」

人間如きがっ！

魔王様に護られている人間如きがっ!!」

どういうことだ？

俺は魔王の間にある魔王のための背もたれが無駄に高い、派手な造りの椅子に座っている。

改めて俺は現状を認識する。

とうとう勇者が俺の元へ…俺を殺しに来たのか…

もうそろそろ来る頃だとは思っていたが、しかし、それがまさか今日だとは……

まるで「どちらか」が狙っていたかのように。

それよりも「今」の俺では「ヤツ」はおろか、勇者にすら勝てるかどうか疑わしい。

問題はそこから、勇者からだ。

今回も今までのように上手くできるだろうか…

勇者は俺とほぼ互角。ならば、手は抜けない。

もしかすると……

初めて勇者を殺してしまうかもしれないな……

そう思っていると、俺には眩しすぎる、力がやって来るのを感じた。

勇者が謁見の間まで到着したようだ。

「…行くか」

俺は一言、そう呟いた後に、仮面を被り、椅子から立ち上がった。

「人間が魔王に護られているとはどういうことだっ!? 答えろっ
!?!」

今度は勇者が大声で尋ねた。

しかし、質問された魔族の一体は、首元に勇者の聖剣が構えられているにも関わらず、勇者を睨みあげるだけで、何も言葉を発しない。

これ以上話すことはない、と言っているような態度だった。

「分かったわ。もういいから……死ね」

勇者は剣を一度首元から遠ざけ、高々構える。

そして、振り下ろした

「 なっ!?! 」

今の驚いた声は魔族のものではない。

勇者の声であった。

勇者は剣を振り下ろしたのだが、その魔族は死ななかった。
なぜなら、

「魔王様っ!?!」

魔王が横から勇者の剣を、振り下ろした聖剣を間一髪で掴んだからだ。

俺が謁見の間に入ると、すでに三十程もの配下がやられていた。そして、今「一人」が殺されようとしている。

俺はすぐに駆け出し、横から振り下ろされた勇者の聖剣を右手のみで受け止める。

「 なっ！！ 」

「 魔王様っ！？ 」

勇者は驚いた声を、俺の配下も同様に驚いた声を発した。

勇者の剣を受け止めたことによって、手から血が流れ、顔には出さないものの、かなりの痛みがある。

そこはまだいい。分かっていたことだ。

人間の魔力とは異なる真の魔の力を持っている者は「聖遺物」によつて傷がつく、つかない関係なく、触るだけで苦しい。

それで傷つけられれば、尚のことだ。

だが、それよりもこの感情。

周りに配下が倒れている様子を見て、浮かんできたこれは

ああ、俺にもまだ、怒りと言う感情が残っていたんだな。

そう実感する。

そこで、

「 魔王！ 貴様っ！！ 」

勇者が俺に声を張り上げて怒鳴る。

「 黙れ 」

それに対し、俺は怒りを込めて、静かに怒る^{いか}。

「 ベレヘット、もうよい。全員下がらせよ。邪魔になる 」

「はっ！」

勇者に殺されかけていたベレヘットは、すぐに他の負傷者の元へ向かった。

「…殺り合つか、勇者」

「望むところだ…が、魔王、貴様が人間を護っているとはどういうことだ？」

「……どうやらベレヘットは余計なことを言ってしまったらしい。」

「なっ！！」

答えはない。

代わりに何も無い空中から邪剣デルフィングを手元に喚びだし、無言で勇者に斬り掛かる。

ガチン、と金属音が室内に響き渡り、それと共に、双方の剣が衝突したことによって突風が生まれる。

避難しきれていなかった数名の配下が吹き飛ばされた。

勇者も焦っている。

だが、俺はそんなことは構わず、続けて斬り掛かる。

何度も金属音が響く中、勇者は叫んだ。

「っ！ ……それが貴様の答えかっ！？ 魔王！！！」

勇者は俺に対し、怒りを顕にしている。

しかし、そんな中でも俺は口を開かない。

理由はいくつもある。

魔王と勇者という敵対関係から、立場など関係なく言えないことまで。

それに、怒っているのは勇者だけではない。

俺も怒っているのだ。

「勇者——！！！」

「魔王——！！！」

互いの剣が再度衝突する。

そして何分たっただろうか…

何度も何度も互いの剣が接触したのだが、剣技では決着がつかず、
そう判断し、魔術を行使し始める。

『闇音色！』

『光が求めしもの。我が求めしもの。共に同じ道を歩むなれば力を貸したまえ！』

俺が魔力のこもった音を利用する黒魔術の幻術・「闇音色」をかけようとすれば、勇者は俺とは真逆の力を、術式の展開用としてではなく、相手の術のインターセプト、または破壊のための詠唱、聖詠唱を唱え、破壊する。

『聖弾っ！！』

『闇に落ちろ！ 無に帰れ！ 消え失せろ！』

勇者が聖魔術による光のみによる実体のない魔力の塊のような弾丸を放てば、俺も先の勇者と同様に、真逆の力である黒詠唱こくえいしやうを勇者の術の破壊として使用し、破壊する。

そのようにして、互いに一步も退かないまま、数時間が経った。

「はあ、はあ、はあ…

まだやるか？ 勇者よ…」

「はあ、はあ、はあ…

貴様こそ、早く、死ね…魔王」

詠唱破棄による超上級魔術の連続行使を多用したために二人とも、魔力にしろ体力にしろすでに余力は残っていないようにに窺える。しかし、この謁見の間には傷が全くと言っていいほど無い。

ここは特別製の部屋である。

知っているのは俺達魔王軍の一部のみ。

だから俺はそれを利用し、術の応酬の間に少しずつ床に魔術式を書き上げていつていた。

そして、互いに力がほぼ残っていない今、ようやく完成した。

そこで、白銀の鎧を纏っている金髪金眼の勇者を見つめながら会話を始める。

「勇者、お前は女だろ？」

それも元の素材は中々の。どうして女としての道を捨ててまで俺に立ち向かう？」

「黙れ！ 誰かが、と言っていたのでは何も変わらない。力なき者が苦しんでいるのに、力を持つ私が立ち向かわないでどうする！」

俺は、苦しくないのか？ と口に出そうとした。

しかし、出さない。

俺にも似たような経験があるからこそ分かる。

苦しいが言えない。自分が弱さを見せれば、周りも不安になってしまう。

そんな思いがあるはずなのだと分かっってしまう。

「……勇者よ、この辺りでやめにしないか？」

俺は提案する。

これも先程口に出さなかった質問とたいして変わらず、勇者を侮辱するような言葉である。

そのことを重々理解してもいるが、言った。

どちらが勝っても、この世界に生きる者は全て、本当の幸福を手

に入れることはできないのだから、と思いながら。

しかし、理由はあっても本当は、言った、よりは言ってしまった、という表現の方が正しい。

「ふざけるなっ！！」

貴様のせいではどれほどの人が傷ついたので分かって居るのか！？

この闘いは貴様の死をもつてのみ終わりを告げる。

やめたければ、貴様が死ねっ！！」

勇者は今まで以上に殺気を込めた声を出す。

…やはり駄目だった。

「仕方がない…」

眠れ、『無魂無明』むしんむみょう——！！」

最上級魔術・無魂無明。

それは直に物体に術式を書き込まなければならず、術式内にいた者にしか効果はないのだが、発動したその時に術式内にいた者全ての意識を無条件に、無常にも狩り尽くす術だ。

そして、狩られた者の意識は術者の思いのままに操ることができてしまう恐ろしさも兼ねている。

俺は互いに魔力が尽き、会話もままならない今が頃合いだと思い、発動させた。

しかし、勇者は笑っていた。

「それを待っていた！」

勇者は嬉々とした口調と共に

消えた。

魔力が空だと思っ込んでいたのだが、そうではなかったのだ。

確かに勇者自体には魔力が残っていないのだが、無くなる前に自

らの聖剣に溜め込み、それを隠していたらしい。
そして自身の剣の切っ先を後ろに向け、溜め込んだ魔力を、加速の為にブースターとして一斉に後方へ放出した。
気がつくや勇者は術式内にはおらず、俺の眼前に剣を高々と振り上げて構えている。

一閃。

俺は肩から斜めに斬られた。
声は出なかった。

「
しかし、体内の
赤い血は出てきた。
止めどなく噴出される。」

そして、俺はそのまま仰向けに倒れた。
仮面も同時に外れ、中から黒髪黒目で少年のような俺の顔が露見される。

「なっ!!!?」
勇者が俺の血と顔を見て、ありえない、と言わんがばかりに驚く。それもそのはず。

なにしろ、赤い血を持っている生物は
この世界では人間だけなのだから。

「ま、魔王、貴様に、人間なのか？」
と、勇者は後退りながら、質問したのか、独り言なのかは分からないような声で呟く。

「全員、魔王様を囲めー！
壁となれー！！！」

その時、俺の配下の魔族が入り込んできた。
つい数時間前の三十人程が。

「何をしている、お前達……退けと言ったはずだ……」

俺は倒れた状態のまま、擦れた声でベレヘットに聞く。

「戻ってくるなどは言われていません！！」

魔王様が亡くなるのならば、我等も共に……」

「お前た　！！！」

俺は怒鳴ろうとする。

しかし、怒鳴らなかつた。

それは、背筋にゾクリと感じさせる、ヤツの気配が感じ取れたからだ。

「う、そ………なんで？」

どうして魔王が人間なの………いえ、魔王は七百年生きているはず………どういうこと？」

勇者がまだ、顔を青ざめて呟いている。

答えてやらなくもないが、その前に、もう一つの、もっとやばいヤツが現れた。

部屋の、勇者の後ろ側の何も無い空中にピキリ、と亀裂が入る。
ヤツが来た証だ。

俺はすぐに傷ついた身体に鞭を打って起き上がった。

「ベレヘット、ヤツが来た。今度は本気で逃げろ」

「っ！ このタイミングで、でございますが…魔王様、今のあなた様の力で大丈夫なのですか」

「ああ。だから　行け」

「 なっ！ くっ！

我らの心は永遠とわに魔王様とともに……

魔王様に勝利を」

そう言い残して、ベレヘット達は走りだした。

「おい！ 勇者！

お前もだ、早く出ていけ」

と、勇者に向かって呼び掛けるが、

「なんで…どうして…」

そんなことばかりぶつぶつ言っつて、俺の言葉が一つも耳に入っていない。

さらに危険なことにどんどん亀裂の方へと近づいて行く。

「やばいな…」

そして俺が駆け寄ろうとすると、

バキリ。

空間が完全に割れた。

いや、割られた。

そこから人間に似ている手が伸びてくる。勇者に向けて。

「くそっ！」

それを見て俺は自らの心臓を、自らの手で貫いた。

刹那の間意識が飛び、そして再び目が覚める。

その時には、俺は特別な力の使用が可能になる。

それにより、脚力を強化し、勇者の元まで一瞬で跳び、勇者を抱えてもう一度引き下がった。

「勇者！ おい、勇者！！」

俺は勇者の顔を軽く叩いてやる。

「えっ、あ、はいっ！」

勇者はなんとか我に帰った。

しかし、ヤツも、これまた人間のような上半身を、すでに割られた空間から出している。

「魔王、あ、あれは？」

勇者は怯えながら、ヤツに指を差し、尋ねてきた。

「あ、あんな、まがまがしい力を持っている奴なんて、初めて見る……」

勇者は身体を震わせ、声を震わせて言った。

「勇者、あれは」

天使だ。

俺は嘘偽りなしに教えた。

「えっ！？」

「本当だ。信じる。そして下がっている」

「貴様は何をするつもりだ？」

それにあんなまがまがしい力を持つのが天使！？

……いや、仮にあれが天使だとしても、なぜここに？」

そりゃ気になるよな、と思いつながら、俺は勇者に真実の一端を教えることにする。

「天使がこの世界に現れたのは……この世界を滅ぼすためだ」

「えっ！？ ちょっと天使でしょ、神の遣いでしょ！？ それがどうして私たちを……？」

「その事情は長くなるから、今は言えない。

そして俺は……天使と闘う」

だからお前は下がっている、と付け足す。

その言葉に勇者は、

「無茶！」

あんなのに勝てる訳がない！

そもそも貴様にはもう余力が……」

と、言いかけて、勇者は固まった。

そして再び口を動かす。

「そんな……傷が癒えてる？」

それに、なんなの？ その力は……？」

俺は天使の元へと進みながら、振り向かずにつづ。

「大丈夫だ。俺にはこの穢力がある」

俺の身体を癒し、さらなる力を与えているのがこの穢力である。

それに、と俺は続けて

「そのための……世界を護るための……魔王だ」

言い終わると同時に天使の全身が割れた空間から出てきた。

見た目は人間の青年のようであり、他に翼が生え、白く薄い布を

纏い、と言った具合に人間が想像しているのと変わらない天使像な

のだが、笑い方だけは卑下していた。

「よー、よー、魔王よー。この世界でいう二週間ぶりだな、おい」

天使は俺に話してくるが俺は無視し、即座に術式を展開して術を作りながら走りだす。

「穢力式魔術」

「遅いよー、魔王ちゃん」

天使は俺の認識をこえる速さで俺の目の前に移動し、眉間にデコピンをする。

そして、それだけで俺の身体は宙に浮いた。

俺はそのまま勇者の後ろの壁に叩きつけられた。

「がつ……！！！」

壁は特別製のため、壊れることはないが、俺の身体は悲鳴を上げ、分かりやすい反応として吐血する。

また、体内の方では背骨を含む複数の骨が砕け、内臓も破裂させられた。

頭だけは、とっさに穢力によって強化したため、破壊は免れた。

普通なら死んでいるのだが、しかし、穢力を使っている今の肉体はすぐに治癒される。

だから、すぐに立ち上がった。

「穢力式魔じ」

「だから遅い、つて！」

「うっ！」

次は腹に膝を入れられた。

天使には魔術と呼べるものが一系統しかない。それも多くの時間を費やして、ようやく発動できる広域穢滅魔術のようなものしかない。

だから、俺と闘う時には肉弾戦しか使わないし、使えない。

さすがにそんな時間をタダで与えるほど俺も甘くはない。

それでも、元々の存在が人間よりも高位なため、素の力でさえ、人間では計り知れない。

俺はその高位の存在の蹴けりにより、今度は肋骨やあばら骨などが砕けただろうが、またすぐに治癒する。

しかし、俺が怪我を即座に治癒できる力があると知っている天使は、続けて同じ場所を蹴りあげる。

「ヒヤハハハッ！」

魔王よ、一年、前と、真逆、だな。一年、前は私、が、圧倒、的な敗、北を受けた、なっ！！！」

「　　っ！！！！」

一体何発貫つたのだろうか。
かなりの数蹴られ続けた。

砕けては、治り、砕けては、治りの繰り返しだ。

すでに口からは声ではなく、血しか出なくなり、床は俺の血で真っ赤に塗り変わっている。

血も穢力により治癒と同時に新しく作られるから失血死はない。
が、無抵抗のままやられ、治癒のことばかりを考えていた訳ではない。
ない。

今の俺では、ヤツよりも弱いことは分かりきっていたことなのだ。
だから、力の差がある中でも使える有効な術を考えている。

しかし、使い時は今ではない。一瞬でいいからヤツにスキを作らせる必要がある。

そう考えていると、腹部への蹴は終わった。

そして、丸まっていた俺は顔を上げるが、目の前にはヤツがいなかった。

「魔王、上っ！！！」

勇者が俺の頭上を指差したまま、叫ぶのを聞いて、俺が顔を上げようとすると　天使の垂直踵落としが俺の頭に決まる。

地面に叩きつけられた。

「がっ！！！」

「魔王！！！」

そして、ヤツは俺の後頭部を踏みつけ、
「いい気味だな。魔王ちゃんよー。はっ！

ようやく、七百年越しの勝利だな！！！」

と、投げかける。

そして、天使は何度も踏みつける。

特別他よりも強化している頭蓋骨でも、いい加減砕けそうなその時だった。

「そこを退どきなさい！！」

勇者が魔王である俺をかばった。

圧倒的実力差を見せつけられ、足を震わせながらも、立ち上がった

「チッ。」

人間風情が誰に物を言っ……なんだ、貴様か」

天使は怒っているのかと思えば、よく分からない反応をし、

「貴様はもう用済みだ」

天使は勇者を殴ろうとする。

ここからだ！と天使の拳は届かないのだが、拳圧による風は別だ。

襲ってくる拳圧は風であるにも関わらず、光速の域に近い速さと、小さな町だとそれだけで粉々に吹き飛ばすことが可能な威力がある。

そして、拳を振りかぶる。

今だ！！

「穢力式魔術・呪カタラ・エマわれた血」

俺は天使が見せた一瞬の隙を見逃さず、奥の手であるこの術を發動させた。

発動すると、天使の足下に大量に吐き出された俺の血が固体となり、無数の赤い腕となって、ヤツの身体にまとわりつく。

「なっ、なんだ、これはっ!？」

貴様か、魔王!？」

天使は叫ぶが、時すでに遅し。

その術は対天使用に俺が創り出し、掴まれた天使は別空間へと、つまりは元いた場所へ強制的に帰還させるものである。

発動条件が一定以上の俺の血を外に流出しなければならぬため、発動が困難なのだが、初めからこうなることは予想できていたからこそ、創りあげた術だ。

「糞がつ! なんだ、これは!？ 糞っ、糞っ!

次だ、魔王! 次こそは貴様を殺し、この世界を消さしてもらおう!」

最後にそう言い残して、天使は消えた。

天使が去った直後、俺と勇者の目が合ってしまった。

「ま、魔王、説明しなさい」

俺は勇者の言葉を無視して穢力を解き、脱力する。

そして、そのまま倒れてしまった。

力の反作用：いや、力の呪いによって意識を失ったのだ。

「ちよっ、魔王!？」

意識を失う直前に俺は、

(ああ、勇者はおどろいているな……ははっ、よかった。今回もどうにか天使を追いやれた。

このまま)

危なかった。

願ってはならないことを、俺と「彼女」の願いを願おうとしてい
た。

願ってしまったら、世界が消えてしまうのに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5063ba/>

孤独な魔王

2012年1月14日00時54分発行